

18世紀フランスの軟質磁器の技術的・様式的変遷とその背景への試論  
—中国・日本陶磁、イラン陶器との関連性の視点から—

長久 智子 愛知県陶磁美術館

軟質磁器(仏:porcelaine tendre)とはヨーロッパ陶磁の分類のひとつで、フリット(ガラス粉末)を中心に白土、石灰、珪砂などを調合して得た胎土を低温焼成したガラス質の白色陶器をさす。対して、中国や日本などで製作されるカオリンと長石を主として高温焼成したいわゆる磁器を、特に硬質磁器(仏:porcelaine dure)として呼び分けている。17世紀終わり頃からフランスで本格的に焼成されるようになった軟質磁器は中国・日本磁器への憧れから生み出された陶器ではあるものの、それ以前の主流であった錫白釉を厚く掛けたファイアンス陶に比べると見た目上格段に硬質磁器に近づいていたため、流通範囲の狭い高級陶器として扱われた。17世紀終わりに登場するフランス最初の軟質磁器窯サン＝クルー窯(Saint-Cloud, ca. 1690-1770)から、18世紀中頃のもっとも優れた製品を製作していた王立ヴァンセンヌ窯(Vincennes, 1741-59)及びヴァンセンヌ窯の後を引き継ぐ王立セーヴル窯(Sèvres, 1759-)までの製品には、それぞれの時代に輸入されていた中国磁器(明時代の景德鎮窯製青花磁器や清時代の単色磁、五彩磁)、日本磁器(有田窯の柿右衛門様式上絵磁器)の影響が器形、文様にも、また釉色のヴァリエーションにも明らかに見てとることができる。これら高級陶器としての軟質磁器の用途に、背景となるフランス王それぞれの治世における対外政策(たとえばルイ14世と清朝・康熙帝との外交)を重ねることで社会史・文化史的な価値を見出すことができる。

加えて先行研究にはなかった新たな視点としてサファール朝イラン(1501-1736)で17世紀終わりから18世紀にかけて製作された合成胎土の白色陶器との関連性を探った。中でもヨーロッパで「ゴンブルーン・ウェア(英:Gombroon ware)」と呼ばれている一連の輸出用軟質磁器は、非常に薄手でガラス質であり、青みがかかった透明感の高い白色の陶器である。これは当時ゴンブルーンと呼ばれていた港(現・バンドル・アッバス Bandar Abbas)からオランダ東インド会社によってヨーロッパに運ばれた製品で、ほとんどが白色無地、または刻文や「蜚手」と呼ぶ透かし文様などがわずかに施されるのみである。その胎土は白色で非常に粒子が細かく、ガラス質というよりは若干粘土質で、一般的なイスラームの合成胎土陶より一層入念に仕上げられている。これらの具体的な製作地は知られていないが、ヨーロッパの軟質磁器の発展期に歩を同じくしてイランから運ばれてきた白く薄手の上質な軟質磁器が、ほぼ同時期に唐突に現れたフランス軟質磁器の胎土調合技術に影響を与えた可能性を否定することはできない。フランス陶磁は東洋と西洋の文化的・政治的優位性が逆転していく17世紀から19世紀への時代の変遷の中で、東洋陶磁の文様の模倣から技術(胎土・釉色・上絵色)の模倣、そして独自の創造へと邁進してゆく。18世紀フランスの軟質磁器はヨーロッパ陶磁が独自性を獲得してゆくまでの激流を見事に映し出しているのである。

(ながひさ・ともこ)